

ことばは神とともに

ヨハネの福音書 1章 1-5節

はじめに

今年から、月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することにしました。ヨハネの福音書は、イエス様の弟子であったゼバダイの子「ヨハネ」によって書かれたと言われています。伝説では、ヨハネは「ヨハネの黙示録」を書いた後、エペソの町でこのヨハネの福音書を書いたと言われています。ヨハネがこのヨハネの福音書を書いた時期は、一世紀末であって、ヨハネも年老いた老人になっていたようです。その意味で、このヨハネの福音書は、年老いたイエス様の弟子が書いた福音書と言えます。

新約聖書には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四つの福音書がありますが、マタイ、マルコ、ルカの三つは「共観福音書」と呼ばれていて、内容はよく似ています。そしてイエス様がなされた出来事を中心に書かれています。それに比べてヨハネの福音書は、「第四福音書」と呼ばれていて、「共観福音書」とも内容が大きく違います。紀元 200 年頃にいたクレメンスという人は、このヨハネの福音書についてこう言っています。「**最後に、物理的ないろいろな事実はすでに諸福音書に記録されていることを知って、ヨハネは弟子たちに励まされて御霊に強く動かされて、霊的な福音書を書いた**」。マタイ、マルコ、ルカなどの「共観福音書」は、イエス様のなされた出来事が中心に書かれているが、「第四福音書」であるヨハネの福音書は、霊的なことが中心に書かれているということです。つまりヨハネの福音書は、イエス様の弟子であったヨハネが、長い信仰生活を経て老人になってから書いた霊的な福音書と言えるのです。

では、このヨハネの福音書は何のために書かれたのでしょうか。ヨハネ 20：31 には、この福音書が書かれた目的が書かれています。「**これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである**」。このヨハネの福音書が書かれた目的は、これを読む人たちが、イエス様こそ神の子キリストであると信じ、永遠のいのちを持つためです。つまりこのヨハネの福音書をよく読めば、イエス様こそ神の子キリストであることがよく分かる、そして救われることができるということです。

1. 三位一体とキリスト

今日の聖書箇所は、「**初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた**」という言葉から始まります。「初めに」という言葉で思い出すのは、旧約聖書の創世記 1：1 の「**はじめに神が天と地を創造された**」という言葉です。そ

の世界が創造された時に、まず「ことばがあった」というのです。つまり、この「ことば」は、世界が創造される前から存在していたと言うのです。そしてこの「ことば」は、2節で「この方」と言い換えられていて、人格的な存在であることが分かります。そして1節では、この「ことば」は、神と共にある方であり、神である方であると言われていました。

では、この「ことば」とは誰のことでしょうか。1：14には、「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた**」とあります。神と共にあって、神である方であり、人となって私たちの間に住まわれた方とは、イエス様のことです。今日の聖書箇所では、イエス様のことが「ことば」と呼ばれているのです。「イエス」という名前は、神と共にあって、神であられる方が人となられた時に、付けられた名前です。ですから、イエス様が人となられる前、世界が創造される前の状態を何と呼ぶのが問題になるのです。御子とかキリストと呼ぶこともできたでしょう。しかしヨハネは、人となられる前のイエス様を、また世界が創造される前のイエス様を、「ことば」と呼ぶのです。

ヨハネは、イエス様は単なる人ではないということを伝えようとします。イエス様こそ、世界が創造される前から存在された方であり、神と共にあって、神そのものである方であるということを伝えようとしているのです。

イエス様は、世界が創造される前から存在していた神である方です。その神が人となられたのが、イエス様です。しかしイエス様は神そのものである方ですけれども、神と共にある方であるとも言われています。神である方ですけれども、神と区別された方であるという意味です。

キリスト教は、三位一体の神を信じています。旧約聖書の申命記6：4には、「**主は私たちの神、主は唯一である**」とありますので、私たちは、神様はただひとりしかおられないと信じています。しかしそのただひとりの神様には、父、子、聖霊という三つの位格があるというのが、聖書の教えです。父なる神も神であり、御子なるイエス様も神であり、聖霊も神である、しかし神は三人ではなく、ただ一人しかおられない、主なる神は、父、子、聖霊の三つの位格を持つ唯一の神であるというのが、私たちの信仰です。

今日の聖書箇所でも、そのことが言われています。イエス様は神ですけれども、父なる神、聖霊なる神とは区別された存在であり、世界が創造される前から存在していた唯一の神であるということが教えられているのです。

2. 創造とキリスト

3節を見てみましょう。「**すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった**」。ここでは、世界はイエス様によって造られたと言われています。使徒パウロも、コロサイ1：16-17で、イエス様による世界の創造について語っています。「**天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています**」。イエス様

は、世界が創造される前から存在し、世界を造られた神であるということが言われています。

イエス様はなぜ「ことば」と呼ばれたのでしょうか。それは、世界は、神様の「ことば」によって創造されたからではないでしょうか。創世記 1 章を見ると、神様は「ことば」によって世界を創造されたことが書かれています。例えば、創世記 1：3 には、「**神は仰せられた。『光、あれ。』すると光があった**」とあります。これに続いて、神様は六日間にわたって、自然、植物、宇宙、動物、人間を、「ことば」によって次々と造られました。

さらに創世記 1：3 には、「**地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた**」とあります。世界が創造される前、父、子、聖霊の三位一体の神様は、存在しておられました。そして父、子、聖霊の三位一体の神様が、世界を創造されたのです。特にイエス様は、世界を創造される「ことば」として創造の御業に携わられたのです。

3. いのち、光としてのキリスト

4-5 節を見てみましょう。「**この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった**」。ここでは、イエス様のもとにこそ、「いのち」があり、「光」があると言われています。

イエス様は、世界を創造された方です。それゆえ、動物、植物、人間などの「いのち」も、イエス様によって造られた、イエス様のもとにあると言えます。しかしここでの「いのち」は、もう一つの意味があります。Ⅰヨハネ 5：11 には、「**その証しとは、神が私たちに永遠のいのちを与えてくださったということ、そして、そのいのちが御子のうちにあるということです**」とあります。ここでは、「いのち」が「永遠のいのち」とも言い換えられています。その意味で、「この方にいのちがあった」というのは、イエス様にこそ「永遠のいのち」があるということではないでしょうか。

聖書は、私たち人間は、アダムとエバが神様に背いて禁断の木の实を食べた時から、罪の性質を持ち、神様との交わりを失い、霊的に死んでいると教えています。つまりすべての人間は、生まれながらにして霊的に死んでいて、「永遠のいのち」を持っていないと言うのです。イエス様は、「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません**」(ヨハネ 14:6)と言われました。「いのち」つまり、「永遠のいのち」とは、父のみもとに行くこと、神様との交わりを回復することなのです。神様との交わりを回復し、神様と共に歩むこと、それが「永遠のいのち」なのです。そして言い換えれば、それが聖書で言う「救い」なのです。

ヨハネが言おうとしていることは、イエス様にこそ救いがある、イエス様にこそ神様と交わりを回復する道がある、イエス様にこそ「永遠のいのち」、本当の意味での「いのち」があるということなのではないでしょうか。

またイエス様にこそ、「光」があります。世界が創造される前、「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあった」とあります。その闇の中から「光」を造られたのがイエス様です。その意味で、イエス様にこそ「光」があります。しかしここでの「光」にも、もう一つ

の意味があります。この世界は、アダムとエバが神様に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持ち、暗闇に包まれてしまいました。聖書は、罪に満ちたこの世界を闇と表現しているように思います。この罪に満ちた闇の世界に、「光」をもたらすのが、イエス様なのだと言おうとしているのではないのでしょうか。

5節に「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」とあります。光は、暗闇の中で希望を与えます。そして、光は暗闇の中で行くべき道を照らします。闇は光を打ち消すことはできません。イエス様は、罪に満ちた暗闇の世界で、私たちに希望を与え、行くべき道を照らしてくださるのです。イエス様は言われました。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます」(ヨハネ 8:12)。イエス様は、暗闇を照らす光であるので、イエス様を信じ従う人は、決して闇の中を歩くことがなく、その人自身も「世の光」とされるのです。そして、人々に希望を与え、行くべき道を示すことができるようにされるのです。

おわりに

今日の聖書箇所を通して、ヨハネは私たちに、イエス様がどんな方であることを教えようとしています。イエス様は、単なる偉大な聖人ではありません。イエス様は、神であり、世界が創造される前から存在し、世界を創造された方です。そして、「いのち」を造られ、「光」を造られた方です。この世が神様に背き、全人類が罪のゆえに死と闇に包まれたとしても、イエス様はこの世に、「永遠のいのち」と希望の「光」をもたらす方なのです。

私たちは最後に、イエス様が「ことば」と呼ばれたことに心を向けましょう。イエス様こそ、神様の「ことば」です。神様の「ことば」によって、世界は創造され、世界に「光」がもたらされ、人々に「いのち」がもたらされました。私たちは今、聖書を通して、神様の「ことば」を持っています。そして、この聖書こそ、イエス様を証している書物です。

神様は、「ことば」を通して御業をなされたように、今も聖書の「ことば」を通して御業をなされます。聖書の「ことば」は、私たちに新しく造り変えます。そして聖書の「ことば」は、私たちに「永遠のいのち」を与えます。そして聖書の「ことば」は、私たちに希望の「光」を与え、私たちの行くべき道を照らしてくれます。そして聖書の「ことば」を通して、私たちはイエス様に出会うのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは三位一体の神です。世界が創造される前から、永遠に存在される主なる神様です。あなたが遣わされた御子イエス・キリストも神であり、世界の創造者です。そして御子イエス・キリストこそ、人となってこの世に来られ、私たちに死から「いのち」へと導き、闇から「光」へと導いてくださった方です。私たちが、イエス様こそ神の子キリストであることを信じ、「永遠のいのち」に与ることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。